

# 柴田川の合戦

「秋月種実勢四千人と問注所治部少輔勢一千人が天山の柴田川で戦う。」

下記は『筑前国続風土記』の一説抜粋

「柴田古城」

天山村あり。村山近江、其子彈正在城せり。筑紫氏端城にして、是筑紫廣門の旗本也。

天正六年の秋、筑前国秋月種實其勢強大に成りて、近邊なれば、先岩谷【岩屋】を責、それより立花表へ動かんとて、肥前浪人綾部駿河守家臣には、内田善兵衛、横田讚岐守、上野四郎右門、木所刑部丞を先手として四千餘人、柴田川原に陣をとる。種實旗下には、長谷山部少輔、熊江修理、芥田悪六兵衛等従かえり。其比問注所治部少輔は、子細有て筑後の本領を立退き、秋月在ければ、同じく打つれ一千餘人、柴田の城に本陣を居へたり。岩屋城主高橋紹運、立花の城主戸次丹後入道道雪是を聞、軍勢を針摺に押出し、川を隔て矢軍を仕かけるか、後には敵味方入亂れ、川中にて散々戦ふ。岩屋方小勢なれば、終日の戦に氣たゆみて、道雪、紹運の勢、岩谷【岩屋】の邑城に引取んとす。種實か勢勝に乘て、先手旗本一手に成りて、二日市、片野を追越して、白川迄押詰る。問注所治部少輔申けるは、案内もしらぬ敵の城下迄深入して、夜軍いかゝ有へき、只本の陣に引取り、明日の一戦可然由云けれ共、種實したかはす、ひたすらかゝりける。紹運は熊と敵をあくまで引うけて、取こめ討た

んとの謀はかりごとなれば、由布美作、小野和泉、綿貫わたぬき佐衛門、園上そのうえ薦野三河等の勇士に二千餘人の勢を添ぜいて、山陰そえより指廻やまかげし、思さしまわひも寄おもぬ敵よらの後うしろより、関ときを咄とつとあげて、爰ここに紛かしこれ彼あらわに顕かかりなやて、掛まっさき悩さきましければ、秋月うら勢裏崩れして引退ひきしりぞく。此勢このぜいをぬかすな者共どもとて、成富、綿貫まっさき眞先掛さきて、種實そなえ備そなえに切かゝる。長谷山、熊江、芥田しんめい、身命たたかえすてて戦ぐんびようへども、軍兵次第うちじにに討死そなえして、備そなえまばらなりに成行いきければ、力及およぼはずして、本の陣所柴田ひきとらの城ひきとらに引取んとするに、二日市と針磨【針摺】の間に、旗馬印はたうましるしすうじゅうほん數十本、幕天まくてんの風しにひらめいて、しずまり返りりて見えにける。秋月あきつき勢ぜい是これを見て、豊後うちだし勢の打出あとづめて後詰ぞするそと心得こころえて、二日市いりえにも入得いりえず。杉塚、長岡ほうぼううち廻よなかり這や夜中ながに夜須や彌なが長ひきとり迄引取けり。岩屋方いりえに討うちとる首あし三百餘也。秋月方あきつきの勢、豊後うちだしより後責あとぜめの旗あしと見みしは、紹運ちぼう智謀ある大将にて、敵あきつきを近邊ちかばに陣をとらせじとの計略からにて、空旗からを立たておかれたるとぞ聞えし。

## 柴田川の合戦

大友氏の耳川敗戦後、大友に対して各地で叛旗が翻ったが、筑前において、先ずその口火を切ったのは古処山の秋月種実(あきづき・たねざね)である。

秋月種実あきつきは基養父きやぶ(きやぶ)の筑紫広門きやぶと共に龍造寺隆信りゅうぞうじに呼応して立ち上がり、筑豊きちゆおよび筑後きちごの一部にも勢力を伸ばし、生葉いくは(いくは:現、浮羽郡浮羽町)の井上城主いの上・門註所鑑景もんちゅうしょ(もんちゅうしょ・あきかげ)を旗本あきかげに引き入れ、更に八女の星野中務大輔吉実あきかげをも配下あきかげに入れるという目覚しい活躍であった。

そのため大友陣営は筑後では矢部の五条氏と生葉の長巖城主・問註所統景のみとなってしまうた。

天正6年の終わりに近い12月●日、立花道雪、高橋紹運が秋月勢の来攻に備えて、立花城、宝満城、岩屋城へ籠城のため入城したのであるが、果たして秋月種実あきつきは先ず宝満城、岩屋城を

攻めんとして、肥前の豪族・綾部駿河守、秋月の将・内田善兵衛、横田讃岐守、上野四郎右衛門、木所刑部之丞、長谷山民部少輔、熊谷修理、芥田惣兵衛など4千人を率いて、筑前・御笠郡天山(現・筑紫野市天山)の柴田川に陣を敷いた。また筑後・生葉郡(現・浮羽郡)の井上城主・門註所治部少輔鑑景も秋月加勢のために手勢1千余人を引き連れて、この戦いに加わった。

高橋紹運は、この状況を見て直ちに立花山の道雪に急を報じ、駆けつけてきた道雪の軍勢と共に御笠郡針摺峠(現・筑紫野市針摺峠)に打って出て、柴田川を挟んで対陣した。

戦は矢戦より始まって銃撃に移り、やがて両軍水中に分け入っての大混戦となった。

秋月勢に比べ、高橋、立花勢は小勢であったが、将兵よく奮戦したので、勝敗は容易につかなかったが、用兵に長けた高橋、立花の両将は思うところあって次第に兵を後退させはじめた。

これを見た秋月種実は、将兵に急迫を命じた。

多勢を誇る秋月勢は、この虚に乗じて前後の兵を一つに纏め、大友勢を追って二日市を越え、片野を過ぎ、やがて大宰府の街を流れる白川の辺りまで追ってきた。

この時、漸く暮色が迫ってきたので、秋月の将・問註所統景は秋月種実に向かって、夜中不案内の敵地に深入りすることは危険であるので、ここは一旦退き、兵に休養を与えて明日に備えるように勧めたが、種実は、今、折角、敵の城下に足を踏み入れながら後一押しのところまで退くことは反って敵に休養を与え味方の攻撃に支障を来すことになる、これを斥け、尚も兵を強引に進めた。高橋紹運は、このことを計算して十分に敵を隘路に引き入れておき、その将・由布美作、小野和泉、綿貫左三兵衛、高迫進士兵衛、成富左衛門尉などに精兵2千人余を指揮させて道路の陰に伏せさせ、時分を計って一斉に梳きの鬨をあげて、どっと前後より襲撃したので、不意を突かれて狼狽した秋月勢は忽ち崩れて態勢を立て直す暇も無く、雪崩れをうって城下から敗走しはじめた。

高橋紹運、立花道雪は、この機を逃さず急迫し、成富、綿貫らは真っ先に突っ込んで、そのまま種実の本陣目掛けて突入した。秋月方も長谷山、熊江、芥田、恵利らの勇士が必死に戦ったが、勝に乗じた大友勢のため次第に敗れて、遂に柴田川の線まで後退した。この時、二日市、針生の間であって数流の旗馬印が夕暮れの風に乗ってはためいていたが、これは、紹運の策略で空旗であったと伝えられている。